特集

住まう

なぜ私たちは熊本に住んでいるのでしょうか。
「生まれたところだから」「自然が豊富だから」「暮らしやすいから」…。
人それぞれにいろいろな理由があり、
「熊本ならでは」の豊かさは多彩です。もっと豊かに。
もっといきいきと。いろいろな人が熊本で輝いて暮らすとはどんなことでしょうか。
7つの視点、「子どもたち」「若者」「働く人々」「女性」
「障害者」「高齢者」「県民」から
熊本に「住まう」ことを考えてみました。

子どもたちにとって、

自然の中で健やかに暮らし、豊かな人間性を育む。

ぼくたちの作った苗木がいつか森を作るんだ！

「やっぱり一本ずつでも植えていかないと、このままじゃ日本も酸素が少なくなって命が短くなると思います」。（豊野小六年・前田久美）

鳥や動物たちを守り、私たちにいろいろな恵みを与えてくれる森。緑に恵まれた熊本に住む私たちは、この恵みの森が永遠にもあると思い込んでいます。本当にそうでしょうか？ここに、森のことを真剣に考え、一本一本ていねいに植樹し、森を守っている子どもたちがいます。「緑の少年団」。緑の中で子どもたちの協調性と奉仕精神を高めることを目的として、熊本県では昭和五十一年に結団。現在、熊本県下に六十九の団体が活躍しています。

平成4年熊本の森林（もり）のつどい（人吉）

昭和六十二年「全国緑の少年団活動発表大会」で優秀賞に輝いた「豊野村緑の少年団」もその一つです。団員数六十四名。豊野小学校四・五・六年生で構成されています。毎年四月の県の植樹祭への参加を皮切りに、一年間を通じて、苗木づくりや空き缶拾い、樹木調査、野鳥の巣箱づくりなどを行っています。これらの野外活動は植木職人や林業従事者など、地域のボランティアの人々が指導、人の輪を通して、自然の大切さを学んでいきます。

「植樹祭の時に植えたスーパー松がぐんぐん生長しているよと聞いてとてもうれしかったです。見に行きたいなあという気持ちがわいてきました」。（小六・林田真沙美）。「緑の少年団」活動を通じて、今、熊本の豊かな緑と心豊かな子どもたちがスクスクと育っています。

若者にとって、

文化を受け継ぎ、伝えることがその土地に生きる心の証。

四百年の伝統を守る〝町のヒーロー〟

男獅子と女獅子がむつみ合い、やがて天へ昇って行く。二十メートルもある梯子（はしご）が大きく揺れ、獅子がその上で舞う。暗闇に浮かび上がる二頭の獅子が牡丹の花を天からまき散らし、祭りのクライマックスを迎える。幻想的な舞いで見る人を魅了する六嘉神社大祭（上益城郡嘉島町）、獅子舞奉納は県第一号指定の無形文化財。戦時中も続けられたという約四百年の歴史を持つ祭りです。

「郷土の心を伝えるという使命感もあります」

片手で梯子に昇って舞うこの獅子舞いは、体力的に充実している青年にしかできない役どころ、言わば花形です。ここ十年、その獅子使いを務めているのが、幼稚園からの幼なじみという金沢清二さん、上村英夫さん、松永倫明さんの三人。

熊本市内に近い嘉島町でも農業を継ぐ若い人は少ないのが現状。しかし、金沢さんたち三人はともに若い農業後継者。三人は高校を卒業してすぐ、この獅子使いを引き受けました。

「体力も技術も必要とする獅子使いは〝町のヒーロー〟。子どもの頃から獅子使いに憧れていました」と上村さん。

「十年たっても、まだ半人前。こういう意味があって、こういう踊り方をするんだって先輩から注意されるんです」と松永さん。豊作祈願の意味を込めた祭りは、こうして次世代へと受け継がれていきます。しかし、「伝統を残さなければという一種の義務感が先にたつこともあります」とも。

三人にとって、地元に残るということは農業を継ぎ、そして獅子舞いをすることだったのです。わが子に農業を継がせるかという問いに、「ウーン？でも、獅子舞いは是非やらせたい」と二十八歳の若い父親たちは明るい声で答えてくれました。

働く人々にとって、

地域に参加し、その中で暮らしの基盤をつくる。

ゴミ出しから始まった男たちのご近所付き合い

日曜日の午前七時。熊本市清水町兎谷にある新興住宅地に「おはようございます」の声々が飛び交います。道端の草取りをする人、掃く人、各家庭から出したゴミの仕分けをする人。約三百五十世帯。子どもからお年寄りまで、特に男性の参加数が多いのがこの地域の特徴です。折角の日曜日、サラリーマンにとってはゆっくり朝寝でもしていたい時刻なのに……。尾形義樓さん（五四）もその一人。「最初はゴミの仕分けなど面倒くさかったのですが、家を一歩出ればお隣さんと挨拶、やがて世間話へ。今では男同士近所付き合いが楽しくてなってねぇ」。

月一回の町内清掃は、地域住民全部で取り組んだ「エコライフ推進事業」がきっかけ。事業が終わったところで、住民から「もっと続けよう」との声が上がり、約三ヵ月。廃品回収で得た益金は、子ども会や老人会などの活動費用に当てられます。省資源・省エネ推進事業は、町内マラソンや花見など〝地域のコミュニケーション〟という思わぬ副産物を生みました。

尾形さんは、そうやって友達になった人たちと畑を借りて野菜づくりを始めました。「昔は仕事人間で、隣が何をやっているのかも知らなかったぐらい。今は近所付き合いが楽しくて――」と尾形さん。働く人、特に男性はともすれば「家は寝るだけ。地域にとってはお客さん」のような存在になりがち。自分の住んでいる場所を見直した尾形さんのライフスタイルは、少しずつ変わってきています。

＊エコライフ推進事業（環境に配慮した消費生活推進事業）＝省資源・省エネを推進する実践グループを一般募集し、その活動をバックアップする事業。平成三年～。

「雑誌類はこっちに一」協同作業は楽しい